

## 第22回環境情報科学センター賞 受賞者

### 学術論文奨励賞

**受賞者：大平 和弘 氏**（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）



**対象業績：世界遺産登録に向けた鳴門海峡における景観の価値  
と視点場の評価に関する研究**

#### 【受賞理由】

受賞者は、世界遺産登録に向け、鳴門海峡の景観の価値に関する研究を継続してきた。近年、その成果は、当センターが刊行する「環境情報科学論文集」および「Journal of Environmental Information Science」に査読付き論文3編（いずれも第一著者）として掲載され、一定の学術的評価を得ている。これら一連の研究が受賞の対象となる業績である。

研究対象は、我が国を代表する景勝地である鳴門海峡や渦潮に係わる景観である。世界遺産登録を目指すなかで、渦潮や鳴門海峡に関連する景観を評価し、その価値を判断することや、景観保全計画へ応用することは重要な課題であると考えられる。受賞者は、これらの課題に対して、オーソドックスな分析・評価手法を用いながら、明確な結論を得ている。その成果は以下のとおりである。①鳴門海峡における可視調査や定点観測により、動的景観としての渦潮の観潮に適した視点場の分析・評価を行い、渦潮の形態や動的変化、海峡景観における要素としての特徴を明らかにした。②視点場ごとの眺望景観の構成要素や可視領域等の分析・評価を通じて、鳴門海峡の自然景観の阻害要因や主要な景観構成領域を明らかにした。③過去の鳴門海峡の景観について、国指定名勝として価値づけされた絵葉書に写し取られた景観を手がかりに、当時の視点場を特定し、そこに見出された景観の価値を明らかにするとともに、名勝指定以降の多様な視点場の発見の可能性を論じた。

以上のような一連の研究成果は、渦潮という動的な景観の捉え方、眺望の阻害要因への対応を中心とした景観の規制・誘導の方向性、時系列的な変遷のなかでの景観の鑑賞法などに関する新たな知見を得ており、学術的な意義が大きいと考えられる。また、渦潮を含めた鳴門海峡の景観的な価値の特定、それらの保全手法の検討に係わる有用な知見を提示しており、さらに、他地域での応用も可能であるなど、今後のより一層の研究の展開が期待される。そこで、「学術論文奨励賞」に相応しい業績と判断した。

#### <対象論文>

- ①大平和弘・大野渉・白取茂（2019）鳴門海峡における渦潮の視点場と見え方に関する研究、環境情報科学研究発表大会論文集33巻、pp.7-12
- ②大平和弘・大野渉・白取茂（2020）鳴門海峡を捉えた眺望景観における構成要素と構成領域の評価に関する研究、環境情報科学研究発表大会論文集第34巻、pp.162-167
- ③Kazuhiro OHIRA（2021）A Study of Viewpoint Areas and Landscape Features of Modern-day Naruto Strait as Seen in Postcards, Journal of Environmental Information Science Vol.2020, No.2, pp.31-41.